



没後50年 野長瀬晩花・原勝四郎

東海道新幹線が開通し、東京オリンピックが開催された年、ちょうど今から50年前となる1964(昭和39)年の3月と4月に、当地出身の画家が相次いで世を去りました。3月31日に東京で亡くなった野長瀬晩花と、4月14日に当地で亡くなった原勝四郎の二人です。

晩花(本名弘男)は若き日に京都で活躍した後、後半生を東京で過ごした日本画家で、原は西洋の絵画を学ぶためにヨーロッパに渡り、かの地を放浪して帰国した後は郷里で制作を続けた洋画家です。

このように異なる道歩んだ二人の画家で、接点もほとんどありませんでしたが、歳は近く(晩花は1889年、原は1886年の生まれ)、明治末から大正にかけての時代に青春期を送り、次々に伝えられる西洋の芸術に憧れて、それを受容しながらも、模倣に止まることのない、個性をもった日本近代の絵画史に刻まれるべき作品を残した点は共通しています。

二人の没後50年にあわせた展覧会を今年度、本館(原勝四郎)と分館(野長瀬晩花)で開催します。生きた時代の共通するものとともに、生まれ育った土地から共有される感覚もうかがえはしないかと思っています。

(学芸員 三谷 渉)

REPORT「宮沢賢治・詩と絵の宇宙」関連企画

宮沢賢治・詩と絵の宇宙:4月19日(土)～6月22日(日)

当館では文学者と美術との関係性をテーマとした展覧会を継続して開催していますが、いつも文学者とその文学作品の魅力を展示で伝えることには苦心します。特に今回の宮沢賢治は文学者であるとともに、科学者でもあり、宗教家でもあり、また音楽家でもありといった、多方面に才能を発揮した人物でしたので、その芸術を紹介するには展示だけでなく、特別な企画を加えて開催することが不可欠だと考えていました。

幸い、宮沢賢治の弟の清六氏の孫で、遺品の管理と紹介に努められている宮沢和樹さんに花巻からお越しいただいて、「祖父・清六に聞いた兄・賢治」と題した講演をしていただくことが出来ました。宮沢賢治がどのような人であり、何をしようとしていたのか、最も近くで接していた清六氏から聞かれたことをもとに、その姿を明らかに伝えていただきました。

また宮沢賢治の文学を、画像や音楽を織り交ぜながら朗読によって伝える試み「朗読コンサート」も会期中に二回行いました。宮沢賢治の世界の有している豊か

田辺市立美術館へのきもち¹²

美術に疎い私が一番お世話になっているのがここ田辺市立美術館です。ここでは時折アクティブで興味深い企画が催されます。先日は宮沢賢治の展覧会において、朗読コンサートがあり演奏の機会をいただきました。朗読と音楽のコラボでしたが、新しいようで実はこの組み合わせは大変古い歴史があります。それは紀元前のギリシア時代まで遡ります。リラという亀の甲羅で出来た竖琴を朗読に合わせて演奏したり、今のフルートなどの管類に相当するパンパイプという楽器と合奏していたという資料が残っています。先日の朗読コンサートで使用された楽器は日本の箏で、それを中心にフルートやヴァイオリンが加わりましたが、まさにギリシア時代を彷彿させる試みだったのではないのでしょうか。

美術と音楽そして言語という組み合わせは、視覚と聴覚という観点から考えますと、少し異なるものです。視覚は目を閉じれば遮断することができますが、聴覚は遮断が難し



筆者を囲んで右から、朗読をしていた田辺市立図書館の仲道子さん、箏奏者の橋本桂子さん、そして学芸員のM氏。

田辺市立美術館NEWS ORANGE Vol.21

編集・発行：田辺市立美術館／熊野古道なかへち美術館

発行年月日：平成26年10月1日

田辺市立美術館

〒646-0015 和歌山県田辺市たきない町24-43
TEL.0739-24-3770 FAX.0739-24-3771
http://www.city.tanabe.lg.jp/bijutsukan/

田辺市立美術館分館
熊野古道なかへち美術館

〒646-1402 和歌山県田辺市中辺路町近露891
TEL.0739-65-0390 FAX.0739-65-0393
http://www.city.tanabe.lg.jp/nakahechibijutsukan/



1931(昭和6)年、45歳頃の原勝四郎(写真左)と、1920(大正9)年、31歳頃の野長瀬晩花。洋装の写真からも、二人がよく西洋の文化を自身のものとしていたことが伝わります。



な広がりを感じていただけたらと計画したのですが、難度も高いもので、実現することが出来たのは、以前からお力添えをいただいている、音楽家の松田淳一さんと橋本桂子さん、そして田辺市立図書館司書の仲道子さんの全面的なご理解とご協力があったからです。おかげでこの企画は予想以上の反響をいただきました(松田さんには、今号の「田辺市立美術館へのきもち」へのご寄稿もいただいていますので、ぜひそちらもご一読ください)。

展覧会の内容に伴ったこうした催しによっても、美術館の活動の幅を広げてゆけたらと思います。

(学芸員 三谷 渉)



宮沢和樹さんの講演会は展覧会の初日に開催しました。

という特徴があります。なにしろ寝ている間も聞こえているわけで、そのおかげで目覚まし時計が役立つわけですから。

この二つの感覚を最大限に生かしたのが先日の企画でした。こういう企画はお客様自身に「楽しもう」という意思を持っていただかないと成立しません。音楽を聴きながらウトウトしてしまった…通常の演奏会でしたらこんな贅沢な空間はありません。しかし朗読コンサートではスクリーンの画像を見て朗読を聞きながら音楽を楽しみ、時折学芸員の説明を聞いて理解を深めるという、お客様にとってはかなり積極的な参加を強いられた企画だったと思います。5月、6月の二回に亘って催されましたが、第一回目終了後「楽しかった、また来たい」というお言葉を多数いただき、おかげで6月は満員となりました(立ち見されたお客様にはこの場をお借りしてお詫び申し上げます)。

我々舞台人にとって、最大の目標であり最高の喜びとは何かお分かりますか?

答えは「同じ出し物で複数回公演する場合にお客様が増えていくこと」です。一回目は数人のお客様が二回目は数十人になったら、こんなに演奏家冥利に尽きることはありません。

今回の企画はそういう意味で大成功だったと思います。この朗読コンサートの仕掛け人は学芸員のM氏です。そうです、長い解説をカンニングペーパー無しに一度も言い漏さず話していた方です。そういえばフルートも吹いていたような記憶があります。私の経験上、彼は今のところ「すべり知らず」です。また何か企画して下さいね!

お客様には「大変お疲れ様でした」とお伝えしておきます。本当にありがとうございました。(ヴァイオリニスト 松田 淳一)

編集後記

今号のレポートをお読みいただくと、今年度前半の充実ぶりを感じていただけるのではないのでしょうか。息つく間もなく後半の展覧会の準備に担当者は追われていますが…私は、このレポート書いて!年報のこの原稿もと、催促の矢を打ち続けています(笑)。でもさらにもうひとつお願い…またわくわくするようなイベントをぜひ!さて、後半も見どころがたくさんです!両館とも関西文化の日(11月15日・16日)や地域のイベントにも参加します!皆様のご来館をお待ちしています。 担当 m.m.

田辺市立美術館NEWS

Vol.21

ORANGE



原勝四郎《陽子像》

1933(昭和8)年頃

作品紹介 原勝四郎《陽子像》

勢いのある筆触で対象を把握し、効果的な色彩の効果で空間を構成する独特の表現を、原勝四郎(1886～1964)は模索の末、1927(昭和2)年頃に自身のものとしてつかみとる。40歳を過ぎてのやや遅い芸術の開花であったが、表現のスタイルを確立してからの原の活動は順調で、1929(昭和4)年から毎年二科展に作品を送り、1940(昭和15)年には同展で岡田賞を受賞し、翌年には会友に推挙されている。この制作の充実と、1929(昭和4)年に結婚して、長女が生まれたという境遇の変化とは無関係ではなかっただろう。家族の肖像も重要なモチーフとなり、生涯に亘って描き続けられた。長女が4歳の頃にその姿を正面から描いた《陽子像》は、幼いだけではない少女の存在をとらえた、原の優れた肖像画の一つである。

モデルとなった原勝四郎の長女、池田陽子さんは本年8月19日に逝去されました。謹んでここに哀悼の念を表します。

(学芸員 三谷 渉)